

老女七八人  
読誦観音経  
若僧二三人  
読誦理趣経

冬遊小田原

百観音霊場巡礼(十七)

朝あさ  
飯泉観音をがみけり  
老女と若き僧侶はともに

冬、小田原に遊ぶ

老女が七、八人、観音経  
(素人でも誰でも読める法華  
経經典)を読誦している...  
そこに、若き僧が二、三人、  
上堂なされ、理趣経  
(得度なされた僧侶でない  
と読むことを許されない真言密  
教經典)を  
読誦され始めた...

聴け深院な薬王院の除夜の鐘  
大晦日の夜半どき、高尾山薬王院では百八  
の除夜の鐘を撞く。百八の煩悩を一つづつ救  
うという。寒い夜空にひびきわたる鐘の音は  
腸に染みる。満天の星を仰げば過ぎゆく年へ  
の感慨がわく。近年、高尾山の自然宝庫の尊  
さを市民も共有。高尾山は市民のシンボルで  
ある。晩秋山麓に高尾山温泉「極楽湯」が湧  
出し、遊山客で賑う。昭和二十年暮れに齋藤  
茂吉は「翁にてわれはすわりぬ傍にくれない  
の梅くれぬの木瓜」を六十四歳に詠む。  
(高尾山健康登山の会々々)

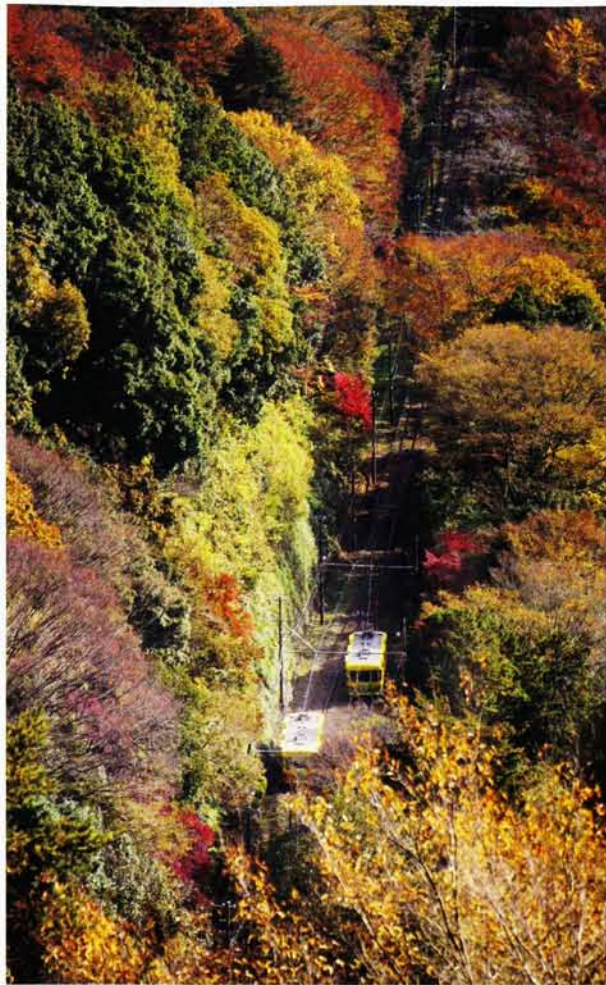
折り折りの記(76)

波多野 重雄

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(42)



季節が秋から冬へと移ろい、色付いた紅葉もやがて落ちてしまう

山おろしの  
月に木の葉を  
吹きかけて  
光にまがふ  
影を見るかな  
(西行「山家集」)

(山から吹きおろす風が、  
木の葉を散らして月に吹  
きかけている。月の光と  
色づいた葉が混じり合っ  
て、清かに照り輝いてい  
る)  
秋から冬へと季節は移  
ろい、朝夕の冷え込み  
よって空気がいつそう澄  
み渡ってきました。冬の  
夜空を仰ぎ見れば、月の  
光や星々の瞬きが、くっ  
きりと目に映ります。風  
に舞う木の葉が月光に照

らし出される姿は、この  
時期ならではの冴えた光  
景と言えるでしょう。  
平成二十七年もあと数  
日を残すのみとなりまし  
た。皆様にとつて、今年  
はどのような一年だった  
でしょうか。嬉しかった  
ことや、辛かったことな  
ど、「喜怒哀楽」を日々  
経験しながら、あつとい  
う間に「今」この時期を  
迎えているような気がし  
ます。  
何事を  
待つとはなしに

明け暮れて  
今年も今日に  
なりにけるかな  
(「金葉集」源国信)  
(何を待つということも  
なく、毎日を明かし暮ら  
して、今年も年末になっ  
てしまったな)  
「歳月人を待たず」。時  
の流れは、人間の感情や  
都合に関わりなく着実に  
過ぎ去ります。「今」は、  
間を置くことがありませ  
ん。艶やかに色づいた秋  
の紅葉を惜しんでも、や  
がて吹き荒れる木枯らし  
が、残らず払い落として  
しまいます。

離苦」は、「父は東へ、  
子は西へ、兄は南へ、弟  
は北へ」と、家族が離れ  
ていくことに喩えられま  
す(政祝「秘蔵宝鑰私記」)。  
さまざまに別れの中でも  
親兄弟、妻子など愛する  
者との別れほど辛いもの  
はありません。生きなが  
らの遠い別れはもちろん  
身近な者が亡くなるとい  
う永遠の別れは尚更の苦  
しみでしょう。  
別れの苦しみをめぐつ  
ては、次のような話が残  
されています。  
平安時代のお話。京都  
の六の宮という所に、見  
目麗しい姫君が住んでい  
ました。若くして両親と  
死別し、乳母(母に代つ  
て養育する女性)の世話  
で、ある男と結婚しまし  
た。姫君はこの夫を頼っ  
て過ごしていましたが、  
やがて夫は任務のために  
遠くの国へと行ってしま  
います。  
七・八年の時が過ぎ去  
りました。夫は京都に戻  
り真つ先に姫君に会いに  
行きますが、どこにも見

当たりません。夫は、京  
の街中を必死に探し回り  
ます。  
ある冬の日のこと、急  
に時雨が降ってきたので、  
雨宿りをしようとする  
家に立ち寄ってみると、  
なにやら窓から人の気配  
がします。そつと覗き込  
んでみると、汚らしい筵  
(敷物)を周りにめぐら  
して、二人の姿が見えま  
した。それは年老いた尼  
と、痩せ細った影のよう  
な若い女性でした。寒さ  
厳しい中で、みすばらし  
い着物を着て、手枕をし  
て寝ています。  
男がじつと見つめてい  
ると、女性は目を覚まし  
愛らしい声で一首の和歌  
を詠みました。  
手枕の  
隙間の風も  
寒かりき  
身はならはしの  
ものにぞありける  
(昔はうたた寝の手枕に  
も、すきま風が寒く感じ  
られたのに、今はこのよ  
うな姿で眠っている。こ  
の身は、世の流れにすつ

かり慣らされてしまった  
よ)  
それは、まさに姫君の  
声でした。すぐさま抱き  
寄せると、変わり果てた  
姿の姫君は「本当に、遠  
くに行つたあなたなので  
すね」と呟くと、そのま  
ま身体は冷たくなって息  
絶えたのでした。  
すると夫は、すぐさま  
出家し法師となつて、尊  
い修行に明け暮れました。  
出家というものは、遠い  
前世からの因縁(つなが  
り)によるものなのです。  
(「今昔物語集」)  
この話は、芥川龍之介  
『六の宮の姫君』や、菊  
池寛『六宮姫君』など、  
多くの作家の題材となっ  
ています。  
没落し、貧しくなりな  
がらも待ち続けた姫君は、  
再会を果たした途端に永  
久の旅へと出発しました。  
夫の苦しみは、どれほど  
のものだったでしょう。  
ところが夫は、いつま  
でも嘆き悲しむことはあ  
りませんでした。すぐさ  
ま出家し、仏道修行に励

んでいます。この世での  
「愛」を捨て去り「道」に  
入つたのでしょうか。会  
う者は必ず離れるために  
あるという「会者定離」  
の理は、「苦しみが無い  
別れ」があることを教え  
てくれたのかもしれない  
ん。  
お釈迦様が出家をする  
際に、父親に語つた言葉  
があります。  
願は我が出家・学道  
を  
一切衆生の愛別離苦を  
皆解脱せしめむや。  
(「過去現在因果経」)  
(お願いです。私の出家  
と仏道修行をお許しくだ  
さい。全ての人々の愛別  
離苦の苦しみを済みたい  
のです)  
辛い別れの向こうには、  
新たな出会いが待ってい  
ます。月にかかつては離  
れゆく浮雲を眺めながら、  
この世のどこかに、苦し  
みの無い別れが隠されて  
いるのではないかと、思  
いを巡らせています。  
(栃木北部教区普濟寺中)